第Ⅴ章　小学校教育実習要項

1　学校運営 …… 69

2　学級経営 …… 70

3　教育課程 …… 73

4　小学校の学習指導方法及び学習指導案作成 …… 74

5　各教科の指導 …… 80

6　複式学級の指導 …… 93

1　学校運営

（1）学校運営の意味とねらい

①　意味

学校運営とは，教育の目的を実現するために，すべての教育活動がより効果的に推進されるように人的条件，物的条件を整備し，校長を中心として学校として組織化し，学校の教育効果を高める機能を指す。

学校運営の具体的な領域としては，①教育目標の設定や教育課程の編成・管理等の学校教育管理，②教職員や児童の人事管理，③施設設備等の物的管理，④学校事務の管理に分けることができる。

②　ねらい

学校運営に当たっては，教育の目的及び学校教育の目標達成を最終のめあてとして行われなければならない。教育の目的及び学校教育の目標は，教育基本法及び学校教育法に規定されているが，これを端的にいうならば，充実した学校生活を通して，豊かな人間性を備えた子供の育成を目指し，その成長発達を図ることである。

学校運営においては，地域社会の要求，一般社会の要求の調和を図り，学校教育目標の達成に向かって全人格的な成長を促すことを目指さなければならない。

（2）学校運営のための組織

学校運営を具体的に推進するためには，学校の教育目標の設定，諸規程の整備，校務分掌の明確な組織付け，学年・学級経営方針の設定などが大切である。

①　学校の教育目標

学校の教育目標は，教育活動を方向付けるものである。この目標は，子供の実態に基づいて，育てたい子供像を想定し，具体的に設定されるものである。

②　学校諸規程

学校は，計画的・組織的に公教育を実施する組織体である。したがって，学校が効果的な教育活動を推進するためには，法令や規則の規定に基づいて各種の学校諸規程を定め，これらの運用を図らなければならない。

③　校務執行の補助機関

ア　教　頭

教頭は，校長を助け，校務を整理し，校長が事故または欠けた場合，その職務を代理し，または行う。

イ　職員会議

職員会議は，校長を中心に職員が一致協力して学校の教育活動を展開するため，学校運営に関する校長の方針や様々な教育課題への対応策についての共通理解を深める場である。

ウ　学校評議員

保護者や地域住民の信頼に応え，家庭や地域と連携協力して一体となって子供の健やかな成長を図っていく観点から，より一層地域に開かれた学校づくりを推進していくために位置付けるものである。

④　校務分掌の組織

校長は学校の責任者として分掌組織を考え，組織体として学校が円滑に運営されるようにする。分掌組織は学校規模等を考慮し，実情に即したものを工夫し，それぞれの職員が分担した校務の処理を通して学校運営に参画していけるようにすることが大切である。

２　学級経営

（１）学級経営とは

学級経営とは，「学級における指導の総体」即ち，学級担任の全ての仕事である。子供の登校から下校まで，学校における全時間を通じてあらゆる場面で行われる。

（２）学級経営の考え方

学級経営に明確な定義はなく，学級経営が学級担任の全ての仕事に関わる用語であるが故に，教師によって学級経営の考え方が異なることも少なくない。学級経営の考え方には大きく，以下のようなものがある。

・学習指導のための条件整備

教師の仕事の中心は教科の授業であり，学級を整備することで学習指導の効果を上げようとすること。学校及び教師を中心に据えた学級の経営技術を重視した考え方であり，学力向上や問題行動の予防と関連する。

・よりよい人間関係，学級集団づくり

学級経営への子供の参画を尊重するもので，人間関係や集団の文化を創り上げることでよりよい学級集団にすること。子供の多様な個性や仲間との協議を重視し，人格の完成を目指した「生きる力」の育成と関連する。

また，学級活動を中心とした特別活動の「自主的・実践的な態度」「自発的・自治的な実践的活動」とも関連し，しばしば「学級づくり」と言われることがある。

（３）学級経営の要素

①　環境構成

子供に対しての直接的な働き掛けのみならず，学級経営を行うために必要となるあらゆる業務のこと。掲示物や机配置等の教室環境や学級だより（学級通信）の作成，家庭との連携などが考えられる。また，ワークシートやプリントの作成，テストの採点業務などの事務的な業務も含まれる。

例）

・整然と貼られた掲示物から子供が美化意識をもち，意図的な机配置から学びやすい環境がつくり出される。
・教室での出来事や子供のがんばりを学級だよりで伝えることで，子供が自分の成長を自覚し，次の活動への意欲につながる。
・学級目標を教室に掲示することで，「今の自分たちは学級目標に近付いているか」を常に意識することができ，「目標→実践→振り返り」のサイクルを形成することができる。

②　指導的領域

教室にルールをつくり，継続した指導を行うことで習慣化して秩序を形成すること。多様な個性をもった子供が集団で生活を送るためには，ルールが必要である。特に，「黄金の３日間[*1]」，「３・７・30の法則[*2]」などと言われるように，年度がスタートする４月は指導的領域が強くなる時期である。明確なルールのもと，子供の人権が侵害されることなく安心で安全に過ごすことができるようにするための重要な領域であると言える。

例）

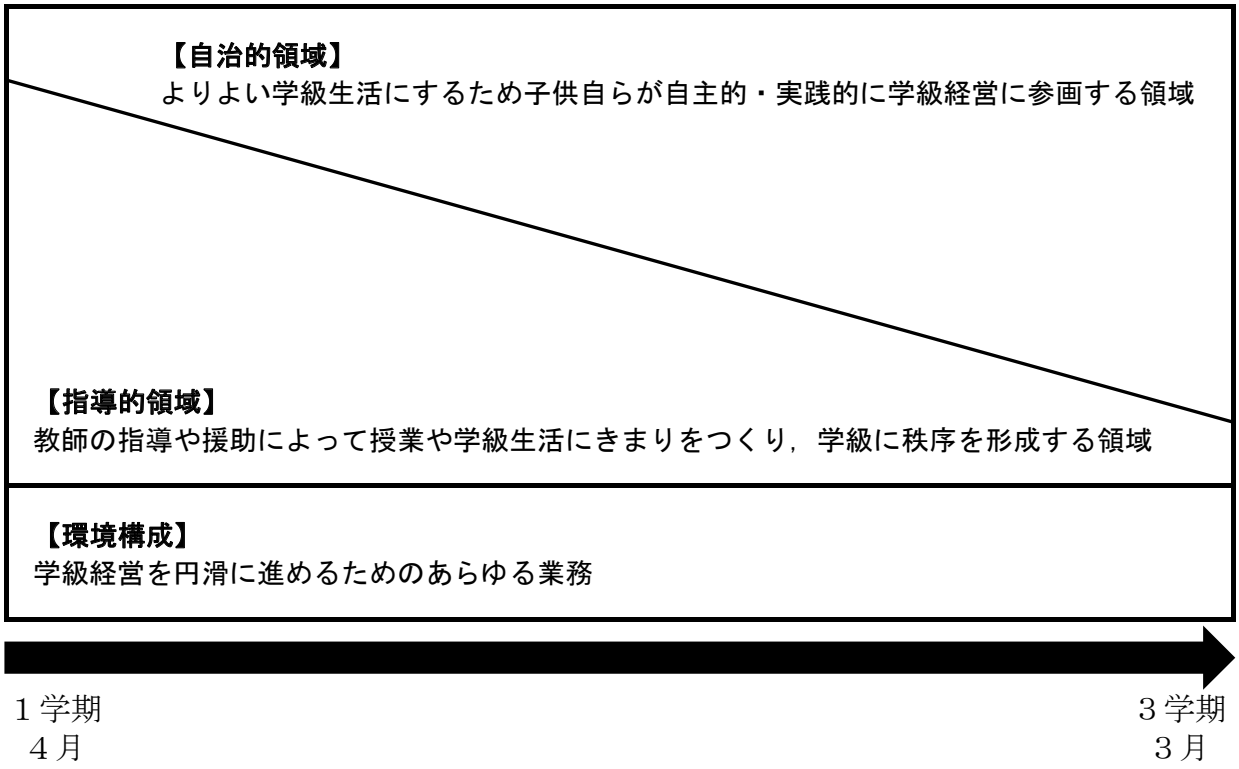
・初めに「いじめは絶対に許さない」「命にかかわる危険なことをしたときは徹底的に指導する」など，教師として最も大切にしていることを伝える。
・一人一役の当番活動や給食配膳のシステム化などを行い，子供が混乱なく学級生活を送れるようにする。

③　自治的領域

この領域は，日本の学級経営に特徴的なもので，子供が自らよりよい学級にするために自主的に活動を行うものである。欧米では，教科ごとに教室を移動し，教科によって集団のメンバーが異なるが，日本は年間を通じて同一メンバーで集団が構成されており，「学級」こそが，学習や生活の単位となっている。

例）
・学級新聞の作成や学級スポーツ大会の開催など，係活動で，児童の創意工夫で楽しい学級を作り上げる。
・１学期の目標達成パーティー，学級の畑で収穫した野菜で調理イベントの開催など，集団としての一体感を高める。
・学級で起こるトラブルも自分たちで話し合い，仲間と協力して解決する。

図：学級経営の要素関係図

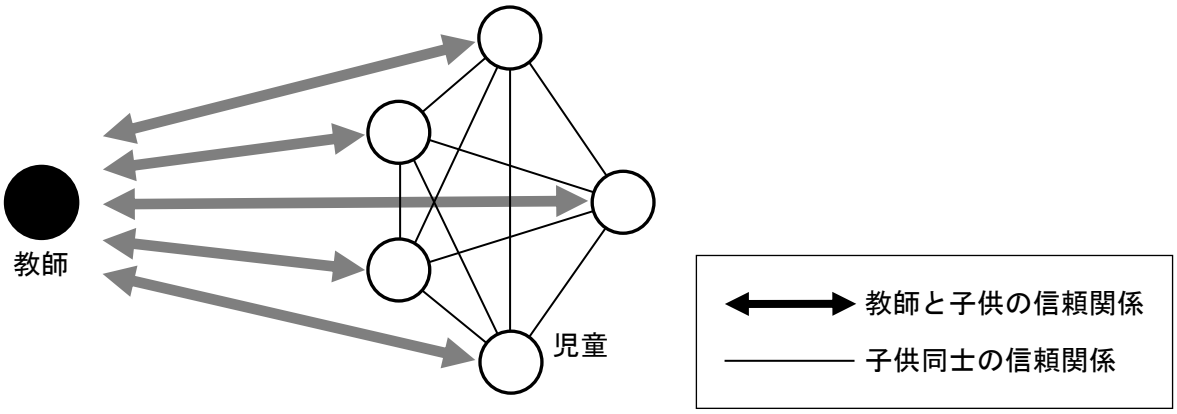


３つの要素がいずれも欠けることなく，計画的に学級経営を行うことで学級に支持的風土が形成され，子供の成長に大きな効果をもたらす。なお，指導的領域と自治的領域は時期によって意図的に比重を変えて指導が行われる。年度当初は，指導的領域の比重が高く，その後はゆるやかに自治的領域の比重が高くなっていくのが一般的である。

（４）信頼関係の構築と教師の役割

①　信頼関係

学級経営を進める上で重要なことは，教師と子供の信頼関係を築くことである。まずは，教師と子供一人一人との信頼関係を築くことに重点を置く。その後は，子供同士の信頼関係を築くことに重点を置き，学級集団として高めていく。



② **教師の役割**

・子供に指導が必要な場合に毅然とした態度で，厳しく接する。【厳しさ】
・丁寧な説明とリーダーシップで学級が進むべき方向を決定する。【決断力】
・笑顔と優しい語り口調で子供に接する。【優しさ】
・子供の話を受容的に聞くようにする。少しゆっくり話す。【安心感】
・笑いやユーモアを交えるなど，子供の話の中に入る。【無邪気】
・教師の好きな給食メニューを紹介したり，子供が好きなアニメ，ゲームの話をしたりする。【親しみ】

＊１　年度が始まる最初の３日間が非常に重要であり，１年間通用する約束事やルールを決めることで学級経営を円滑に進められるという考え。

＊２　最初の３日間，７日間，30日間で段階的に指導事項を増やしていき，学級に秩序を形成しようとする考え。

３　教育課程

（１）教育課程の編成

教育課程とは，教育目標を達成するために，学校が総合的に組織した教育計画である。これは，カリキュラム（Curriculum）とも呼ばれており，日常の教育実践は，これによって推進される。

教育課程の編成の基本的な要素は，学校の教育目標の設定，指導内容の組織，授業時数の配当の三つである。教育課程の編成については，法的にもいくつかの規定がある。

・学校教育法施行規則
・小学校学習指導要領など

教育課程は，法的な規定を踏まえて，学校の教育目標を達成するためにどうあればよいかについて，全職員で研究，討議し合って，学校で編成しなければならない。

（２）教育課程編成の問題点

教育課程は，教育目標を達成するための総合的な計画である。しかし，ややもすると，教育活動を行うに当たって，学校の教育課程などを無視したり，まるで教科書を教育課程のごとく考えている場合さえ見受けられたりすることがある。

教育課程を編成し，実施する上で，一般的には，次のような問題点が見られる。

・地域や子供の実態等を考慮して，全職員の協働によって編成するものであるということを考えていない。
・教育目標が飾りものとして掲げられているだけで，具体的に教育課程の中に生きていない。したがって，各教科，道徳及び特別活動それぞれの指導の重点も不明確で，一人一人の教育実践も教育目標の具現を目指して進められにくい。
・各教科，領域ごとに作られた年間指導計画が，全体として調和がとれていないものとなり，指導内容も重点化されていない。
・それぞれの学校の独自性と主体性をもった，本当にその学校の子供の教育にふさわしい教育課程になっていない。したがって，教師の指導も消極的で生き生きとした教育活動が進められない。
・実践の後の反省と評価が具体的に行われないため，教育課程の改善につながらない。学校が組織的・計画的に教育実践を進め，人間性豊かな子供を育て，社会と時代の要請に応えていくためには，常に，全職員の力で，よりよい教育課程を求めて行かなければならない。

（３）附属新潟小学校の教育課程

変化の激しい社会の状況に対し，これからは未来の創り手となるために必要な資質・能力を確実に備えることのできる学校教育の実現が求められる。

当校では，これからの社会の様々な困難や課題に直面するであろう子供たちが，目的や課題に応じて自らよりよく課題解決し，豊かな人生を送ることができるようにするために**「豊かに考える子供を育む教育課程」**を編成した。

豊かに考える子供とは，目的や課題に応じて様々な資質・能力を発揮し，課題解決する子供である。学習活動だけでなく，学校教育において実生活や実社会において豊かに考える子供を目指している。それと同時に，自ら目的を達成したり，課題を解決したりするために必要な資質・能力を育成する。そのために，次の視点で教育課程を編成し，実施している。

○　育成する資質・能力（知識・技能，思考力・判断力・表現力，態度（学びに向かう人間力））の設定
○　豊かに考える子供を育み，資質・能力を育成する各教科の授業づくり
○　豊かに考える子供を育み，様々な教科等の資質・能力を育成する教科等横断的な単元開発
○　すべての学習の基礎となる資質・能力（協働性・ツール活用能力）を育成する取組
　→「附属新潟式学級力」「学習スキル」を高める取組，ＩＣＴの活用
○　豊かに考える子供を育み，資質能力を育成するカリキュラム・マネジメント
　→校時表，年間指導計画，学校行事等の弾力的な改善

豊かに考える子供を育み，資質・能力を育成する教育活動は，今求められている「主体的・対話的で，深い学び」を実現する教育活動であり，当校では，このような教育活動を 具現することができるようにするための教育課程を編成，実施しているのである。

４　小学校の学習指導方法及び学習指導案作成

＊第二部第Ⅲ章　「学習指導及び学習指導案作成の基礎・基本」参照

＊＊

◆参考資料１

学習指導案の立て方

新潟大学附属長岡小学校

１　「授業」とは

（１）「学び手である子供」「教材」「教師」の３つの要素の相互作用である。
（２）教材を媒介として，子供が仲間や教師との双方向的な情報の流れを維持・発展させながら，認識・技能などを目標の方向に形成していくための実践的な過程・活動である。
（３）授業の組織・展開は教師が行うが，学習活動は子供主体の活動であり，教育的な価値の実現は，子供においてなされなければならない。
（４）授業は，子供の成長を見通した意図的・計画的な教育の営みである。

２　学習指導案について

（１）仮説としての授業設計

①　授業設計の意義

「授業を設計する」とは，指導内容，教材，学習環境，教師の支援等によってもたらされる効果を予測しながら，教師自らの教授活動を予測・立案していくことである。このことは，仮説（授業設計書「学習指導案」に書かれた授業過程によって期待される成長プラン）を形成することである。この仮説は学び手である子供一人一人の成長を願って立てられるものである。

②　学習指導案の役割

学習指導案は，上記の授業設計を，ある書式によって具体化したものであり，「子供の学習活動の構想」である。それは，教師の「授業構想」でもある。

そこで，次の点が重要になってくる。

ア　どのような子供に
イ　どのような目標を立て（どのような成長を期待して）
ウ　どのような方法で
エ　どのような展開をすればよいか

③　学習指導案を書く意味

○　授業をどのように行うかの指針をもつため。
　（指針であり，修正されるものであることを前提にしている）
○　授業がどのように行われるか，第三者が理解できるため。
○　自分の授業を振り返り，評価し，次の授業に生かすため。

（２）学習指導案の形式

学習指導案の形式は，授業実践の目的に応じて様々である。各学校，及び研究内容によっても変わってくる。ただ，各項目が有機的に結び付き，子供の学習が具体的にイメージできるようにすることが大切である。

３　学習指導案の作成・実行・評価の手順

（１）授業前

①　子供をとらえる（観察・どのような子供か仮説を立てる)。

↓

②　単元（主題・活動）〈教育内容の一つのまとまり〉を決める。

※　年間活動計画等を参考にする。

↓

③　単元の目標を明らかにする。

※　学習指導要領等を参考にする。

↓

④　教材を選択する。

ア　目標から検討する。

イ　子供の実態から検討する。

ウ　安全性，地域性，季節などから検討する。

↓

⑤　指導計画を立てる。

※　教材の構造化を図る（子供の意識の連続・発展)。

↓

⑥　本時の計画を立てる。

ア　本時のねらいを設定する（単元の目標との関連を図る)。

イ　展開の計画を立てる（子供の意識の連続・発展)。

ウ　評価の観点・方法を明確にする。

（２）授業中〈子供の動きを見取る〉

①　子供を肯定的に見る（子供のどのような動きも，授業を動かしている)。

②　焦点付けて見る。

○　教師の支援の場で

発問・指示・説明・助言・板書・机間支援・資料提示の際の子供の反応で。

○　子供の活動の場で

話し合い（発言・聞く)・表現・実験・体験的な活動などでの子供の様子で。

③　授業評価とのかかわりで見る。

○　本時の主眼から角度付けて見る。

④　子供の細かな反応を大切にする。

○　うなずき，首かしげ，表情，等。

⑤　見取ったことをメモする。

○　座席表等にメモし，その子供の記録として残していく。

（３）授業後

①　諸資料を基に，授業を分析し，検討する。

○　子供の意識の流れを洗い出し，分析する。

子供に授業者が期待した成長が見えたか。また，効果的だった要因・阻害した要因について検討を加える。

②　総括的評価をする。

③　学習指導案を再構成する。

◆本校の教育実習における学習指導案の形式

本校の学習指導案の特色

（１）子供の追究問題（◎）を大事にする。

子供が「自分でこのことを追究していく」ととらえたものが◎である。学級で１つの場合もあるし，複数存在する場合もある。

基本的には教師から与えられたものではなく，**子供自らが問題にしていること**でなければならない。つまり**「教師が問うから考えてみる」ということではなく，「このことがはっきりしないから（みんなで）追究していきたい」ということ**である。この◎の質がその後の追究に大きく影響する。

（２）内容仮説，方法仮説の妥当性を検証する過程を大切にする。

子供は自分のもった問いの解決に向けて，「こう考えたらどうか」と仮説を立てる。これが「内容仮説」である。そして「こういう方法で考えたらどうか」と解決方法を立案する。これが「方法仮説」である。内容仮説，方法仮説の妥当性の検証を繰り返すことで，子ども自らが追究し，学びが深まっていく。

（３）子供の成就感・満足感を大切にする。

成就感・満足感は，単なる「わかった」「できた」ではない。「こう考えたからできた」と自分の立てた仮説が正しかったことに満足感をもったり，「こういう方法で取り組んだらできた」と自分の立てた方法が妥当であったことに成就感を得たりする姿である。また「今度はこういう学習をしたい」「生活の中で生かしてみたい」と次の学習や生活につなげていこうと意欲に満ちている姿である。このような姿を大切にしたい。

第〇学年〇組　〇〇科　学習指導案

〇月〇日（　）〇校時
指導者　　〇〇　〇〇

1　単元名（主題・活動名）　　〇〇〇〇

2　子供と単元（主題・活動）
（１）子供の実態
・本単元（主題・活動）にかかわる子供の①興味・関心，②知識・理解，③問題追求の傾向性を記述する。
（２）主な指導内容
・指導内容とその位置付け（系統）を記述する（学習指導要領を参照のこと）。

3　単元（主題・活動）の目標
・本単元（主題・活動）における■■■の学びの様相と，（理解し）気付き，できるようになってほしいことを記述する。

4　評価基準

5　指導の構え
・本単元（主題・活動）の「どこを」「どのように」留意して指導しようとするかを記述する。

6　指導計画　　配当時間〇時間　本時〇次　〇／〇時間
１次
２次
３次

7　本時の指導計画

（1）本時のねらい　　※単元（主題・活動）の目標との関連を意識する。

（2）展開

段階	子供の追求の広がりや深まりと教師の支援	留　意　点
問いの発生（　分）／問の解決（　分）	子供の意識 （本時のスタートの子供の意識を書く。） Ｔ１○○○○○○○○○○○。 子供の意識 （主要な発問や指示などを書く。） **◎　～は，～なあのか。** Ｔ２○○○○○○○○○○○。 子供の意識 Ｔ３○○○○○○○○○○○。 子供の意識 ・複数の反応を予測し，○○さんならこのように考えるなと予想してかく。 ・複数の反応（重なりやずれ）を生むことができるかどうかが，子供の中に問題が成立するかどうかの大切なポイントである。子供が問題を持たないと，１時間の授業が，単なる作業で終わってしまうおそれがある。 ・終末の意識が次の問題につながっていくことが大切である。	※指導の手だてについて留意すべきことを記述する。 〈例〉 ・どんな教材を提示するか。 ・どんな考えとどんな考えを取り上げていくか。 ・予想した反応が出ないときはどうするか（代案）。 ・個別にどんな支援をするか。 ・板書 ・学習形態 等 評価

（3）評価方法

※　略案の場合は，Ａ４　１枚に「６　本時の指導計画（１）（２）」を記述する。

※　詳しくは，示範授業の活動案を参考にすること。

※　学習指導案の形式は，実習校の形式を使用する。

◆実習生の授業

（１）よい点

① 情熱にあふれ，表情が生き生きとしている。
② 手間をかけた教材が準備され，若さや柔軟さから生まれたアイデアがある。
③ 休み時間には子供とともに汗を流して遊び，一生懸命に準備して授業に臨むことが，自然に子供の共感を呼んでいる。

（２）問題点

① その時間に追究する問題（◎)が不明瞭。
② 子供に考える時間を与えない。
・沈黙は子供が考える大事な時間である。沈黙を恐れて，発問を言い換えてばかりいたり，少数の挙手児童にすぐ指名したりすることが多い。
③ 子供が問題にしていることや，やりたがっていることに関係なく，プラン通りに先に進めようとする。
④ 子供の発言の枝葉末節の部分に振り回されて，その時間の大切な指導内容を見失ってしまう。
⑤ 子供の発言を，教師が「そうですね」「とってもいいですね」と評価してしまう。
「今の考えをどう思いますか」と全体に返すことがない。
⑥ 板書の構想をもたなかったり，字が小さすぎたりするために，子供の考え方のずれが，鮮明にならない。

５　各教科の指導

国語，道徳及び体育の３教科について例示する。

【国語】

１　目　標

学習指導要領における国語科の目標は，次のとおりである。

言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次の通り育成することを目指す。

（１）日常生活に必要な国語について，その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
（２）日常生活における人とのかかわりの中で伝え合う力を高め，思考力や想像力を養う。
（３）言葉がもつよさを認識するとともに，言語感覚を養い，国語の大切さを自覚し，国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

「言葉による見方・考え方を働かせ」るとは，子供が学習の中で言葉への自覚を高めることである。国語科では，様々な内容を自然科学等との視点から理解することを目的とはしておらず，言葉そのものを学習の対象としている。

「言語活動を通して，国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次の通り育成することを目指す。」とは，（１）から（３）の資質・能力を，子供にとって必要感のある言語活動をもって育成することを目指すということである。

この国語科の目標と，三つの柱である「知識及び技能」，「思考力，判断力，表現力等」，「学びに向かう力，人間性等」の資質・能力に基づき，２学年ごとに目標が示されている。例として，以下に第１学年及び第２学年の目標を示す。

［第１学年及び第２学年］

「知識及び技能」

日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに，我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。

「思考力，判断力，表現力等」

順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い，日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えをもつことができるようにする。

「学びに向かう力，人間性等」

言葉がもつよさを感じるとともに，楽しんで読書をし，国語を大切にして，思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。

「知識及び技能」の内容は，「（１）言葉の特徴や使い方に関する事項」，「（２）情報の扱い方に関する事項」，「（３）我が国の言語文化に関する事項」で構成されている。「第１学年及び第２学年」では身近なことを表す語彙を増やすことが求められている。

「思考力，判断力，表現力等」の内容は，「Ａ　話すこと・聞くこと」・「Ｂ　書くこと」，「Ｃ　読むこと」で構成されている。この学年では，経験したことや身近なことについて，順序に気を付けて話したり，聞いたり，書いたり，読んだりすることが求められている。また，「第３学年及び第４学年」では，目的を意識して，中心に気を付けながら話したり・聞いたり・書いたり，読んだりすることが求められている。さらに，「第５学年及び第６学年」では，意図に応じて複数の資料等を関係付けながら話したり・聞いたり，書いたり，読んだりすることが求められている。

２　内　容

上記の内容は言語活動を通して指導されるのであるが，その際は，指導が効果的になされるよう，「思考力，判断力，表現力等」において，内容ごとに学習過程が示されている。

「Ａ　話すこと・聞くこと」

○話題の設定，情報の収集，内容の検討
○構成の検討，考えの形成（話すこと）

○表現，共有（話すこと）
○構造と内容の把握，精査・解釈，考えの形成，共有（聞くこと）
○話合いの進め方の検討，考えの形成，共有（話し合うこと）

「Ｂ　書くこと」

○題材の設定，情報の収集，内容の検討
○構成の検討
○考えの形成，記述
○推敲
○共有

「Ｃ　読むこと」

○構造と内容の把握
○精査・解釈
○考えの形成
○共有

３　指導上の留意点

・主体的・対話的で深い学びを実現するための工夫をすること。
・読書指導の改善・充実を図ること。
・外国語活動・外国語科と連携を図ること。
・言語能力の育成に向けて，教科横断的な視点から教育課程の編成を図ること。
・情報収集や情報発信の手段として情報機器を活用すること。

４年〇組　国語科学習活動案

令和〇年〇月〇日（〇）〇校時
指導者　〇〇　〇〇

１　単元名　「登場人物を紹介しよう－『一つの花』他－」

２　子供と単元

（１）子供の実態

前単元では，『白いぼうし』（光村４年）や関連作品を読み，登場人物の性格について考えた。行動や会話に関わる叙述を結び付けて読んだり，関連作品を読み比べたりすると，登場人物の性格が具体的に想像できることを捉えてきた子供たちである。

本単元では『一つの花』（光村４年）を主教材として，家族の絆を題材とした作品を複数読み，登場人物の気持ちの変化を考える。『一つの花』は三人称客観視点で書かれており，一読しただけでは登場人物の心の内を想像することが難しい。そのため，複数の場面の叙述を結び付けて，登場人物の気持ちの変化を読み深めていく子供の姿が期待できる。

（２）主な指導内容

本単元の指導内容を，「複数の場面の叙述を結び付けると，登場人物の気持ちの変化を読み深められること」とおさえた。これは小学校学習指導要領解説　国語科編の第３学年及び第４学年の内容２［思考力・判断力・表現力等］，Ｃ読むこと「エ　登場人物の気持ちの変化や性格，情景について，場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること。」を受けている。

３　単元の目標

家族の絆を題材とした作品を複数読み，家族の思いについて叙述を基に仲間と話し合う中で，複数の場面の叙述を結び付けると登場人物の気持ちの変化を読み深められることを理解し，叙述を根拠にして家族の思いを登場人物紹介カードに表すことができる。

４　評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
様子や行動，気持ちや性格を表す語句の量を増やし，話や文章の中で使っている。	登場人物の気持ちの変化について，場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像している。	進んで，登場人物の気持ちの変化について，場面の移り変わりと結び付けて想像しようとしている。

５　指導の構え

〇家族の関わりを描いた作品を複数読み，家族の思いを登場人物紹介カードに表す場の設定

子供が，家族の絆を題材とした作品をもっと読みたいと意欲を高めてきた状況で，家族の絆を題材とした作品を複数読み，家族の思いを登場人物紹介カードに表す場を設定する。このことにより，叙述を根拠にして，家族の思いを具体的に想像しようとする姿が期待できる。

〇登場人物の気持ちの変化について，全文シートを用いて自分の読みを整理する場の設定

子供が，行動や会話に関わる叙述に着目して考えたいと意欲を高めてきた状況で，登場人物の気持ちの変化について，全文シートを用いて自分の読みを整理する場を設定する。このことにより，着目した叙述にサイドラインを引いたり，想像したことを書き込んだりして自分の読みをつくっていく姿が期待できる。

〇登場人物の気持ちの変化について，全文シートの拡大版を用いて自他の読みを交流する活動の組織

子供が，仲間の考えも聞いてみたいと意欲を高めてきた状況で，登場人物の気持ちの変化について，全文シートの拡大版を用いて自他の読みを交流する活動を組織する。その際，場面を比較しながら話し合うことを大切にする。このことにより，複数の場面の叙述を結び付けて，登場人物の気持ちの変化を読み深める姿が期待できる。

６　単元計画　配当時間７時間　本時２次　５／７時間

１次　①②『一つの花』を読み，感想や疑問を基にして学習計画をつくろう。
２次　③お母さんは，どうして自分のおにぎりをゆみ子に分けたのか。
　　④お父さんは，どうしてゆみ子をめちゃくちゃに高い高いしたのか。
　　⑤◎お父さんは，どんな気持ちで「一つの花」を見つめていたのか。（本時）
３次　⑥自分が選んだ本で人物紹介カードを書こう。
　　⑦人物紹介カードを読み合い，学習のまとめをしよう。

７　本時の指導計画（本時５／７）

（１）主眼

「一つの花」を見つめる父の気持ちについて叙述を基に仲間と話合う中で，複数の場面の叙述を結び付けると，ゆみ子の幸せを願う父の気持ちが読み深められることを理解し，「一つの花」にこめた父の思いを人物紹介カードに書くことができる。

（２）展開

過程	子供の学びの広がり・深まり	留意点　○主な手立て
見通しをもつ10分／解決する25分	〈A児の追求〉 お父さんは「高い高い」をすることで食べ物では得られない喜びをゆみ子にあげようとした。次は，お父さんが何も言わずに汽車に乗っていってしまったのはなぜなのか考えたい。 父が何も言わずに汽車に乗って行ってしまった理由について考えたいと意欲を高めている。 **Ｔ１　お父さんは，どうして何も言わずに汽車に乗って行ってしまったのでしょうか。** 「一つの花を見つめながら。」とあるから，「一つの花」を見ながら何か考えていたんじゃないかな。でも，どんな気持ちかはっきりしない。 「一つの花」を見つめる父の気持ちについて，詳しく読んで確かめたいと意欲を高めてくる。 **◎お父さんは，どんな気持ちで「一つの花」を見つめていたのか。** **Ｔ２　前後の場面を比べながら読み，自分の考えをノートに書きましょう。** 「高い高い」をした２場面では，まだ戦争に行くとは決まっていないけど，３場面では戦争に行く汽車に乗らなければならなくなっている。そんな状況だから，ゆみ子に幸せになってほしいという気持ちをこめて「一つの花」を見つめていたんだな。 複数の場面の叙述を結び付けると，ゆみ子の幸せを願う父の気持ちが読み深められることを理解し，「一つの花」を見つめるお父さんの思いを人物紹介カードに書きたいと意欲を高めてくる。	〈スタートの意識〉 ・お父さんは，どうして何も言わずに汽車に乗って行ってしまったのかな。 ○父の行動の理由について，自他の解釈を聴き合う活動の組織 ○全文シートを用いて読みを整理する場の設定 ○叙述を基に仲間と話し合う活動の組織 評）複数の場面の叙述を結び付けると，ゆみ子の幸せを願う父の気持ちが読み深められることを理解しているか（発言，記述）
新たな問題を見出す10分	**Ｔ３　「一つの花」を見つめるお父さんの思いを人物紹介カードに書きましょう。** ２場面と３場面の状況を比べて読んだら，「一つの花」を見つめるお父さんの思いがはっきりした。他の作品も読んで，登場人物紹介カードを書きたいな。 「一つの花」を見つめる父の思いを人物紹介カードに書き加えることができ，他の作品も読んでみたいと意欲を高めていく。	○「一つの花」に込めた父の思いを登場人物紹介カードにまとめる場の設定 評）「一つの花」を見つめる父の思いを人物紹介カードに書くことができたか（記述）

（３）評価方法

「一つの花」を見つめる父の思いを書いた人物紹介カードの記述から，複数の場面を結び付けて，ゆみ子の幸せを願う気持ちが読み深められたかを評価する。

【道 徳 科】

１　目　標

学校における道徳教育は，特別の教科である道徳（以下「道徳科」という。）を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり，道徳科はもとより，各教科，外国語活動，総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて，子供の発達の段階を考慮して，適切な指導を行わなければならない。

（「第１章　総則」の「第１　教育過程編成の一般方針」の２　前段）

道徳教育推進上の配慮事項は次の４点である。

１　道徳教育の指導体制と全体計画
２　指導内容の重点化
３　豊かな体験活動の充実といじめの防止
４　家庭や地域社会との連携

道徳科が目指すものは，学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の目標と同様によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことである。

道徳科の目標

第１章総則の第１の２に示す道徳教育の目標に基づき，よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため，道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習を通して，道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる。

道徳教育…学校教育全体を通して行う。
　　道徳教育の全体計画に示される。
道 徳 科…道徳科以外における道徳教育と密接な関連を図りながら，計画的，発展的な指導によって補ったり，深めたり，相互の関連を考えて発展させ，統合させたりする。
　　年間指導計画に示される。年間35時間（１年生34時間）

２　内　容

（１）内容構成の考え方

道徳教育の目標を達成するために指導すべき内容項目を以下の四つの視点から，「第１学年及び第２学年」，「第３学年及び第４学年」，「第５学年及び第６学年」の学年段階に分けて示している。

A　主として自分自身に関すること
B　主として人との関わりに関すること
C　主として集団や社会との関わりに関すること
D　主として生命や自然，崇高なものとの関わりに関すること

道徳の内容項目は「第１学年及び第２学年」が19項目，「第３学年及び第４学年」が20項目，「第５学年及び第６学年」が22項目にまとめられている。小学校から中学校までの内容の体系性を高めるとともに，構成やねらいを分かりやすく示して指導の効果を上げるなどの視点から，それぞれの内容項目に手掛かりとなる「善悪の判断，自律，自由と責任」などの言葉が付記されている。

（２）道徳科の指導計画

各学校においては，校長の方針のもとに道徳教育の推進を主に担当する教師を中心に，全教師が協力して道徳教育を展開するため，「道徳教育の全体計画」とそれに基づく「道徳科の年間指導計画」及び「学級における指導計画」を作成する必要がある。

①道徳教育の全体計画…学校における道徳教育の基本的な方針を示すとともに，学校の教育活動全体を通して，道徳教育の目標を達成するための方策を総合的に示した教育計画である。
②道徳科の年間指導計画…道徳科の指導が，道徳教育の全体計画に基づき，児童の発達の段階に即して計画的，発展的に行われるように組織された全学年にわたる年間の指導計画である。
③学級における指導計画…全体計画を児童や学級の実態に応じて具体化するものであり，学級において教師や児童の個性を生かした道徳教育を展開する指針となるものである。

3　道徳科の指導

（1）学習指導案の内容

学習指導案は，教師の指導の意図や構想を適切に表現することが好ましく，各教師の創意工夫が期待される。一般的には次のような事項が取り上げられている。

ア　主　　題　　名…原則として年間指導計画における主題名を記述する。

イ　ねらいと教材…年間指導計画を踏まえてねらいを記述するとともに教材名を記述する。

ウ　主題設定の理由…年間指導計画における主題構成の背景などを再確認するとともに，①ねらいや指導内容についての教師の捉え方，②それに関連する子供のこれまでの学習状況や実態と教師の願い，③使用する教材の特質やそれを生かす具体的な活用方法などを記述する。

エ　学習指導過程…一般的には，学習指導過程を導入，展開，終末の各段階に区分し，子供の学習活動，主な発問と予想される子供の発言，指導上の留意点，指導の方法，評価の観点などを指導の流れに即して記述する。

（2）道徳科に生かす指導方法の創意工夫

ねらいを達成するには，子供の感性や知的な興味などに訴え，子供が問題意識をもち，主体的に考え，話し合うことができるように，ねらい，子供の実態，教材や学習指導過程などに応じて，最も適切な指導方法を選択し，工夫して生かしていくことが必要である。

① 教材を提示する工夫
② 発問の工夫
③ 話合いの工夫
④ 書く活動の工夫
⑤ 動作化，役割演技など表現活動の工夫
⑥ 板書を生かす工夫
⑦ 説話の工夫

これらのことを主題のねらいや学年の発達段階，学級の実態に応じて工夫して取り入れた授業を行う。

4　評価について

〈道徳教育の評価〉

教師が子供の人間的な成長を見守り，子供自身が自己のよりよい生き方を求めていく努力を評価し，それを勇気付ける働きをもつようにする。

〈道徳科の評価〉

・数値による評価ではなく，記述式であること。
・他の子供との比較による相対評価ではなく，子供生徒がいかに成長したかを積極的に受け止め，励ます個人内評価として行うこと。
・他の子供生徒と比較して優劣を決めるような評価はなじまないことに留意する必要があること。
・個々の内容項目ごとではなく，大くくりなまとまりを踏まえた評価を行うこと。
・発達障害等の子供についての配慮すべき観点等を学校や教員間で共有すること。
・現在の指導要録の書式における「総合的な学習の時間の記録」，「特別活動の記録」，「行動の記録」及び「総合所見及び指導上参考となる諸事項」などの既存の欄も含めて，その在り方を総合的に見直すこと。

第２学年○組　道徳科学習活動案

○年○月○日（○）第○校時
指導者　○○　○○

１　主題名　　がんばりのあとには　Ａ－５　希望と勇気，努力と強い意志
（教材名：『あと少し』　小学どうとく　はばたこう明日へ２（教育出版））

２　児童と主題
（１）児童の実態
本主題では，教材「あと少し」（教育出版）を基に，やるべきことをやり遂げるよさを考える。子供たちは，登場人物「ぼく」ができるまで頑張れたことについて，うまくいかなくても努力して二重とびができるようになったことやできなくても何度も練習したことに目が向くだろう。そこで，「ぼく」のようにうまくいかない時の自分の気持ちをハートメーターを使って考える場を設定する。すると，自分には諦めたい気持ちがあるのに，ぼくができるまで頑張れたのはなぜか明らかにしたいと意欲を高めてくる。そこで，「ぼく」がやめてしまいたい気持ちを乗り越えてできるまで頑張った時の気持ちを話し合う活動を組織する。仲間と話し合う中で，やるべきことを諦めずにやり遂げると自分の成長を感じることに気付くだろう。すると，具体的に自分が頑張りたいことを考えてみようと意欲を高めてくる。そこで，主題の学びをこれからの生活場面でどのように活かしていくか考える場を設定する。このことにより，これからの生活の中で自分もやるべきことを諦めずにやり遂げようと意欲を高める姿が期待できる。

（２）主な指導内容
本主題は，小学校学習指導要領特別の教科道徳編の「第３章第２節内容項目の指導の観点　Ａ　主として自分自身に関すること　５　希望と勇気，努力と強い意志　第１学年及び第２学年　自分のやるべき勉強や仕事をしっかりと行うこと」を受けている。そこで本主題の学習内容を「やるべきことをやり遂げると自分の成長を感じること」と押さえた。

３　主題の目標
主人公が諦めずに練習し続けた姿と自分の経験を関連させながら，努力を続けることのよさを仲間と話し合う中で，やるべきことをやり遂げると自分の成長を感じられることに気付き，これからの生活の中で，自分のやるべきことをやり遂げようとする意欲を高める。

４　評価基準

道徳的価値の理解	多面的・多角的な見方への発展	自分自身との関わりでの価値の深まり
・自分のやるべきことをやり遂げると自分の成長を感じることに気付いている。	・やり遂げることの価値について，様々な立場や場面で捉えたり考えたりしている。	・これからの生活の中で努力し続けたいやるべきことを具体的な行動で考えている。

５　指導の構え
○　うまくいかない時の自分の気持ちをハートメーターを使って考える場の設定
アンケートを基に，自分の経験を想起しながら，うまくいかない時の自分の気持ちを考える。さらに，ハートメーターを活用し，気持ちを可視化することで，自分の経験とぼくの行動，頑張りたい気持ちとやめたい気持ちを比較しながら考える姿が期待できる。

○　「ぼく」ができるまで頑張れた時の気持ちを話し合う活動の組織
「ぼく」の立場に立って気持ちを考え，「ぼく」ができるまで頑張れた時の気持ちを話し合う。仲間と考えを交流しながら，やり遂げることの価値について多面的・多角的に考えを深めていく姿を期待できる。

○　本主題の学びをこれからの生活場面でどのように生かしていくか考える場の設定
やるべきことを諦めずにやり遂げると，自分の成長を感じることをこれからの生活の中でどのように生かしていくか考えることができるようにする。具体的なこれからの自分を想像しながら，自分の行動を考える姿が期待できる。

６　本時の展開

過程	子供の学びの広がり・深まり	留　意　点
問いをもつ・見通しをもつ10分	〈A児の追求〉 できるまで練習を続けたことはすごいな。 〈B児の追求〉 休み時間も家でも何回も練習したことがすごいな。 教師の範読を聞き，「ぼく」がうまくいかなくても頑張ったことに目が向いてきている。 **Ｔ１　「ぼく」のように頑張りたいけどうまくいかない時，自分ならどんな気持ちですか。** 途中でやめたくなる気持ちもあるかもしれないけど，やっぱりできるまで頑張ると思う。私ならあきらめたくなるのに，「ぼく」は，どうして頑張れたのかな。 途中で諦めたくなることもあるかもしれない。ぼくならやめちゃうかもしれないのに，「ぼく」は，なんで頑張れたのかな。 自分には諦めたい気持ちがあるのに，ぼくができるまで頑張れたのはなぜか明らかにしたいと意欲を高めてくる。	・事前のアンケートで，諦めてしまった経験や２年生で頑張りたいことを聞いておく。 ・教材文「あと少し」を範読しながら，場面絵を黒板に提示していく。 ○「ぼく」のようにうまくいかない時の自分の気持ちをハートメーターを使って考える場の設定。 ・事前アンケートにも触れ，子供たちの経験を想起させ，やり遂げられない時の気持ちを考えさせる。
／　問いを解決する25分	**◎「ぼく」ができるまでに頑張れたのはなぜだろう？** **Ｔ２　「ぼく」が頑張れた時の気持ちを話し合おう。** 二重とびが跳べるようになるためには，頑張ってたくさん練習するしかない。 ↓ できるまで頑張ったら，今より成長するんだ。私も，頑張れる自分になりたいな。 絶対に跳べるようになりたいから，跳べるまで練習を頑張るぞ。 ↓ できるようになるまで頑張れば，本当に嬉しい気持ちになれるんだな。ぼくも最後まで頑張りたい。 やるべきことをやり遂げると自分の成長を感じることに気付き，これからの生活で自分が頑張りたいことを具体的に考えようと意欲を高めてくる。	○「ぼく」ができるまで頑張れた時の気持ちを話し合う活動の組織 ・吹き出しに気持ちを書き込むことで「ぼく」の立場に立って考える。 ・やり遂げるよさを見付けたら，自分の立場で考えさせる。
実践への意欲化を図る10分	**Ｔ３　今日学んだことをこれからどんな場面で生かせそうですか。** 今日は，できるまで頑張ると今までより頑張れる自分になれることが分かった。これから，ピアノの発表会でうまく弾けるように諦めないで頑張れる自分になりたい。 今日は，頑張ると本当に嬉しい気持ちになると分かった。これから算数の勉強を頑張れば，すごい自分になって嬉しいと思う。 これからの生活の中で，やるべきことを努力し続けようとする意欲を高めていく。	○本主題の学びをこれからの生活場面でどのように生かしていくか考える場の設定 ・ハートメーターを使って，学習後の自分の気持ちを表す。 ・事前アンケートを用いて本時の学習を振り返らせる。 評：発言，ワークシートへの振り返りの記述，ハートメーターから，評価する。

７　評価方法

ハートメーターへの振り返りの記述から，これからの自分の生活の中ですべきことをやり遂げ，自分の成長に向けて努力しようとする意欲が高まったかを評価する。

【体育科】

１　目　標

体育や保健の見方・考え方を働かせ，課題を見付け，その解決に向けた学習過程を通して，心と体を一体として捉え，生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

（１）　その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに，基本的な動きや技能を身に付けるようにする。

（２）　運動や健康についての自己の課題を見付け，その解決に向けて思考し判断するとともに，他者に伝える力を養う。

（３）　運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し，楽しく明るい生活を営む態度を養う。

〈第１・２学年〉（１）　各種の運動遊びの楽しさに触れ，その行い方を知るとともに，基本的な動きを身に付けるようにする。

（２）　各種の運動遊びの行い方を工夫するとともに，考えたことを他者に伝える力を養う。

（３）　各種の運動遊びに進んで取り組み，きまりを守り誰とでも仲よく運動をしたり，健康・安全に留意したりし，意欲的に運動する態度を養う。

〈第３・４学年〉（１）　各種の運動の楽しさや喜びに触れ，その行い方及び健康で安全な生活や体の発育・発達について理解するとともに，基本的な動きや技能を身に付けるようにする。

（２）　自己の運動や身近な生活における健康の課題を見付け，その解決のための方法や活動を工夫するとともに，考えたことを他者に伝える力を養う。

（３）　各種の運動遊びに進んで取り組み，きまりを守り誰とでも仲よく運動をしたり，友達の考えを認めたり，場や用具の安全に留意したりし，最後まで努力して運動をする態度を養う。また，健康の大切さに気付き，自己の健康の保持増進に取り組む態度を養う。

〈第５・６学年〉（１）　各種の運動の楽しさや喜びを味わい，その行い方及び心の健康やけがの防止，病気の予防について理解するとともに，各種の運動の特性に応じた基本的な技能及び健康で安全な生活を営むための技能を身に付けるようにする。

（２）　自己やグループの運動の課題や身近な健康に関わる課題を見付け，その解決のための方法や活動を工夫するとともに，自己や仲間の考えたことを他者に伝える力を養う。

（３）　各種の運動に積極的に取り組み，約束を守り助け合って運動をしたり，仲間の考えや取組を認めたり，場や用具の安全に留意したりし，自己の最善を尽くして運動する態度を養う。また，健康・安全の大切さに気付き，自己の健康の保持増進や回復に進んで取り組む態度を養う。

２　内　容

体育科の内容は，運動領域と保健領域に分けられ，運動領域の内容の構成は基本的に，低・中・高学年の３段階で示され，各学年での運動の取り上げ方や年間計画においても弾力性をもたせることができるようにされている。保健領域は，第３学年から第６学年まで取り上げられている。

〈運動領域〉

学年	1・2	3・4	5・6
領域	体つくりの運動遊び	体つくり運動	
	器械・器具を使っての運動遊び	器械運動	
	走・跳の運動遊び	走・跳の運動	陸上運動
	水遊び	水泳運動	
	ゲーム		ボール運動
	表現リズム遊び	表現運動	
		保健	

ア　体つくり運動　　心と体の関係に気付くこと，体の調子を整えること，仲間と交流することなどの体ほぐしをしたり，体力を高めたりするために行われる運動である。
・　「体ほぐしの運動」,「多様な動きをつくる運動遊び」(低学年),「多様な動きをつくる運動」(中学年),「体の動きを高める運動」(高学年)

イ　器械運動系　①「器械・器具を使っての運動遊び」(低学年)
・　「固定施設を使った運動遊び」,「マットを使った運動遊び」,「鉄棒を使った運動遊び」,「跳び箱を使った運動遊び」
②「器械運動」(中・高学年)
・「マット運動」,「鉄棒運動」,「跳び箱運動」

ウ　陸上運動系　①「走・跳の運動遊び」(低学年)
・「走の運動遊び」,「跳の運動遊び」
②「走・跳の運動」(中学年)
・「かけっこ・リレー」,「小型ハードル走」,「幅跳び」,「高跳び」
③「陸上運動」(高学年)
・「短距離走・リレー」,「ハードル走」,「走り幅跳び」,「走り高跳び」

エ　水泳系　①「水の中を移動する運動遊び」,「もぐる・浮く遊び」(低学年)
②「浮いて進む運動」,「もぐる・浮く運動」(中学年)
③「水泳」(高学年)
・「クロール」,「平泳ぎ」
・「安全確保につながる運動」

オ　ボール運動系　①「ゲーム」(低・中学年)
・「ボールゲーム」,「鬼遊び」(低学年)
・「ゴール型ゲーム」,「ネット型ゲーム」,「ベースボール型ゲーム」(中学年)
②「ボール運動」(高学年)
・「ゴール型」,「ネット型」,「ベースボール型」

力　表現運動系　①「表現リズム遊び」(低学年)
・「表現遊び」,「リズム遊び」
②「表現運動」(中・高学年)
・「表現」,「リズムダンス」(中学年)
・「表現」,「フォークダンス」(高学年)

〈保健領域〉(３～６学年)
「健康な生活」,「体の発育・発達」,「心の健康」,「けがの防止」及び「病気の予防」

３　指導上の留意点

（１）各運動の特性をとらえ，運動の楽しさを味わうことのできる指導を大切にする。

運動には，競争する楽しさを味わう運動，できた喜びや達成した喜びを味わう運動，模倣したり自分のイメージを表現したりして楽しむ運動など様々な特性がある。各運動の指導において，その運動固有の楽しさを十分味わわせるようにする。

（２）子供の意欲を喚起し，自ら進んで課題解決に取り組むことのできる指導を工夫する。

子供一人一人の思いや願いを明らかにし，子供の立場から運動をとらえて教材づくりをしたり，学習過程を工夫したりして，子供がめあてに向かって自分の課題を把握し，活動を工夫するなど自主的・自発的に学習に取り組むことができるようにする。

（３）子供と共に運動する中で，児童の動きを見取り，一人一人に応じた援助をする。

子供一人一人は，運動に対する興味・関心，運動技能などの違いがある。この違いを認め，子供が今もっている力を出発点として運動に取り組むことから始め，一人一人に応じた手立てを工夫したり，励ましや賞賛したりするなどの個に応じた援助を大切にする。

（４）運動の特性，子供の実態に応じて，評価の工夫をする。

運動する子供自身が，めあてを決め，活動を工夫して，結果を基に修正するという自己評価活動を大切にする。また，仲間とのかかわり合いの中で教え合う，確かめ合うなどの相互評価の活動も取り入れる。そのために，学習カードを作成，活用し役立てる。

（５）その他，特性に応じたグループ編成，用具や場の工夫，準備運動の工夫を心掛けて指導する。

第◯学年◯組　体育科学習指導案

令和◯年◯月◯日(◯)　◯校時
授業者　教育実習生　◯◯　◯◯
指導者　教　諭　　◯◯　◯◯

1　単元名

できるかなできそうかな　レベルアップランド

2　単元の目標

・助走を付けて片足でしっかりと地面を蹴って上方に跳ぶことができる。　【知識・技能】
・よい動きや考えたことを友達に伝えることができる。　【思考力・判断力・表現力等】
・走の運動遊びや跳の運動遊びに進んで取り組もうとしている。　【学びに向かう力・人間性等】

3　単元の指導構想

（1）指導内容

本単元は，学習指導要領体育科第２学年の目標（２）に準拠して設定する。

> （２）各種の運動遊びの行い方を工夫するとともに，考えたことを他者に伝える力を養う。（中略）
> 教師から提案された楽しみ方や，自己や友達が考えた楽しみ方から，自己に合った楽しみ方を選択することもその一つである。

本単元では，自由な運動遊びで感じた感覚を基に，自分の目標をもち，他者からのアドバイスによって視点を得て，達成に向けた動き方を考えるように構成する。

そのための指導の重点を二つとする。一つ目は，子供が自分の遊びたい物を選んで活動することができ，自分に合った目標をもつことができるようにすることである。二つ目は，子供が自分の新たな動き方を自覚することができることである。そのために，グループで，それぞれの目標を共有する場を設定する。このとき，実際にやって見せて仲間から具体的なアドバイスをさせる。そうすることで，子供は動き方を知り，他者からのアドバイスを受けて，自分の動き方に対して新たな視点を得る。

このような指導により，子供は，目標に向かって他者から得た視点をもちながら自分の動き方について考え，自分に合った動きを身に付けていく。

（2）評価基準

知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
・三段階の難易度で構成される運動の場における用具を用いた動きについての知識・技能。	・自分の動き方について考えたり自覚したりして動き方を工夫する力。	・友達の目標を共有し誰とでも仲良く関わり合いながら運動遊びをしようとする態度。

（3）子供の実態

本学級の子供は，体育学習について意欲的である。できないことや難しいことに対しても積極的に取り組んで挑戦しながら活動している。動き方について詳しく問う場面では，思ったことや考えたことを積極的に発言する子供も多い。このような子供の意欲的かつ積極的な姿を仲間との関わり合いにつなげ，互いに動き方を見合ったり教え合ったりする姿を目指す。

（4）指導の構想

働き掛け１：難しかった運動遊びと難しかったことやできるようになりたいこととを問う。

３段階の難易度がある運動遊びを経験させ，難しさを明らかにして課題を焦点化し，自分に合った目標をもたせるための働き掛けである。

まず，難しかった運動遊びとどこが難しかったかとを問う。やりにくかった運動遊びの難しさを明確にするためである。次に，できるようになりたいことを問う。課題を中核的な内容である「自分の動き方」に焦点化させるためである。

働き掛け２：グループ分けを提示し，実際に動きを見せながら話し合う場を設定する。

グループに分かれて，自分の目標を伝えさせ，実際にやって見せて仲間からアドバイスを得させるための対話を支える働き掛けである。

まず，同じ運動遊びを目標とする３段階のレベルが混在する３～４人グループに分ける。次に，実

際に動きを見せながら話し合う場を設定する。自分の目標を伝えさせ，実際にやって見せて仲間から具体的なアドバイスを得させるためである。

働き掛け３：自分の映像を見る場を設定し，どのように動いたかと思ったこととを問う。

どのように動いているのかを知らせ，自分がどんな動き方ができるようになったのかを明らかにさせるための働き掛けである。

まず，自分の映像を見る場を設定し，どのように働いたかと思ったことを問う。自分がどのように動いたかを自覚し，自分がどんな動き方ができるようになったのかを明らかにさせるためである。

４　指導計画（全５時間）

時	学習のねらい	主な学習活動
1	◎お気に入りの遊びを見付けよう。	◎遊び場で遊ぶ。
2	◎たくさん挑戦してできた遊びを紹介しよう。	○好きな遊びを選んで，たくさん挑戦する。
3	◎どうすれば，目標とする動きができるようになるのかな。	○できるようになりたい遊びを目標にして，友達と互いに助言し合って動きを試す。
4	◎選んだ遊びを，どんなふうに組み合わせればよいかな。	○取り入れたい遊びを選んで，レベルアップランドを作る。
5	◎レベルアップランドで，一番楽しかった遊びを振り返ろう。	○みんなでレベルアップランドを楽しむ。

５　本時の構想

（１）ねらい

ゴム跳び遊びの実際の動き方を基に，友達とアドバイスし合う活動を通して，動き方の視点を理解し，達成に向けた動き方を考えることができる。

（２）展開（本時３／５時）

学習活動と予想される子供の反応	教師の働き掛け
○　３段階の難易度がある運動遊びを経験し，難しさを明らかにして，自分に合った目標をもつ。 ・輪くぐりのところは，大きい輪は簡単だったけど，輪が小さくなったら当たっちゃった。 ・ゴム跳びは，ゴムが高くなると難しいな。 ・高くてもゴムを揺らさないで飛びたいな。 ・もっと高いゴム跳びがあったらやってみたいな。	○　難しかった運動遊びとどこが難しかったのかとを問い，できるようになりたいことを問う。 ・発問「もうちょっとでできそうなのにできない遊びやちょっと難しい遊びはありましたか。それはどこで困っていますか」 ・発問「どんなことができるようになりたいですか」 ※　どれも全部できる子供には，どの運動遊びでどう動けるようになりたいかを問う。
○　どのように動いているのかを知り，自分がどんな動き方ができるようになったのかを明らかにする。 ・前の足は跳べている。あとちょっとだ。 ・後ろの足があんまり上がってないから，今度はもっと遠くから斜めに跳んでみようかな。	○自分の映像を見る場を設定し，どのように動いたかと思ったこととを問う。 ・指示「友達から撮ってもらった動画を見てみましょう」 ・発問「目標に近付くようにどのようにやってみましたか。やってみて，どう思いましたか」

（３）評価

自分の動き方について，実際に動きを見せながら話し合うことを通して，自分の動きの調整を図っているかをワークシートの記述から評価する。

６　複式学級の指導

（１）複式学級成立の根拠

①　「学級」の成立と「学年制」

「学級」とう考え方は近代以前にはなく，学校が就学義務の体制下におかれる近代になって初めて生まれた。知識・技能を子供生徒に習得させるための能率化をねらったもので，「等質的な子供生徒」を教室に収容して一斉授業という授業形態をとる。

「等質的な子供生徒」は，大体において同じ年齢であれば等質的であろうと考えて「学年制」の中で集められる。これは，同一の年齢の生徒で一つの集団を区切り，一定の期間が経過すれば全員が進級する制度である。この学年制という考え方を取り上げたのは，近代教育の父といわれるコメニウス（Comenius，J. A.，1692～1670，チェコスロバキア）であった。

我が国は明治５年（1872年）に学制を布いて就学を奨励した。明治19年（1886年）には，小学校令で義務教育を明らかにするとともに，文部省令で「尋常小学校ニ於テハ80人以下（中略）ハ教員一人ヲ以テ之ヲ教授スルコトヲ得」として，学級を想定している。明治24年の「学級編制等ニ関スル規則」の説明書で「学級ト称スルハ一人ノ本科教員ノ一教室ニ於テ同時ニ教授スヘキ一団ノ児童ヲ指シタルモノニシテ（中略）其一学級ハ一学年ノ児童ヲ以テ編制スルコトアルヘク又ハ数学年ノ児童ヲ合セテ編制スルコトモアルヘシ」と学級の概念を詳細に規定した。

②　学級編制と複式学級

学級を構成することを「学級編制」という。この学級編制は，一定の法律基準に従いながら，学校が編制することになる。ここでまず問題になるのは，一学級の子供生徒の人数である。

我が国では，明治19年（1886年）の文部省令で，一学級の子供生徒の人数は「80人以下」としていたが，昭和16年（1941年）の国民学校令施行規則で「60人以下」となって，戦後学校教育法施行規則で「50人以下を標準とする」とされた（第20条）。

小学校の学級編制は，小学校設置基準第５条では，「小学校の学級は，同学年の児童で編制するものとする。ただし，特別の事情があるとき，数学年の児童を一学級に編制することができる。」としている。この条文でいう「特別の事情」とは，公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律（以下「標準法」）によれば，「児童または生徒の数が著しく少ないか『その他特別な事情がある場合』」である。（「その他特別な事情」とは，特別支援教育をさす。）

現在，「標準法」では，小学校の学級編制基準を，次の数を基準として都道府県の教育委員会が定めることとしている。

・同学年の児童で編制する学級（単式）　……　一学級40人 ・二つの学年の児童で編制する学級（複式）……　一学級16人 ※第１学年を含む学級にあっては一学級８人

複式学級，つまり，二つの学年の児童によって構成される学級は，こうして同学年の児童が少ないときに，法律・政令の定めるところによって編制されるのである。複式学級に対して，同学年の児童によって構成される学級を「単式学級」と呼ぶのが通例である。

（２）複式学級観

①　二つの複式学級観

複式学級観として，次の二点が挙げられる。

１）変則的な学級編制であるとする見方
　　伝統的な学年制度からみた複式学級観

２）学級編制の一つとして，これを有効に利用していこうとする見方
　　学年にとらわれない生活集団的な複式学級観

②　積極的な複式学級観

複式学級は法令上の変則的性格をもたせられて設けている。しかし，設けられ方は“変則的”であっても，学級にいる子供と教師の人間関係は，教育的に有効なものでなければならない。

複式学級は，生年月日が２か年に亘る子供によって構成されている。“一つの学級”である。そ

こには，１年早く入組した子供と遅く入組した子供とがおり，いずれも２年間過ごすのであり，先に来た者と後から来た者とが１年間共に過ごすのである。そして，そこには，共に学ぶ子供たちがいるのである。

複式学級では上学年的立場と下学年的立場を繰り返すことによって無意識的にも影響し合い，切磋琢磨することによって，単式学級とは違った豊かな人間関係をつくり，社会性が伸ばされていく面が見られる。学習場面においても子供同士が学年の枠を超えて，時にはリーダーとなり，フォロワーとなって，自分の考えをタテ・ヨコ双方に存分に交流させ合いながら，学習を深めるのである。

ここには，単式学級に追随した学習指導ではなく，正に複式学級でなければならない学習指導や教育が行われるのであり，複式学級の存在を積極的に認める考え方がある。

（３）学級経営

複式学級では，上下学年がともに一つの教室で生活し，学習する。このことによって，単式学級では見られない教育効果が期待できる。一つは人間関係における教育効果であり，もう一つは学習指導における教育効果である。

①　豊かな人間関係の醸成

複式学級では，学年の違う子供の縦のつながりを生かした，よりよい人間関係が育つことが期待できる。複式学級では，ちょうどきょうだい関係のように上学年の子供が，学級生活のいろいろな面について案内，助言することで，下学年の子供に生活の仕方やルールを伝えていく。このことによって，学習，係活動，遊び等に伝承性と発展性とが生まれる。単式学級とは違った縦の人間関係を経験することで，社会性が伸ばされていくのである。

また，上学年の子供の優れた考えや技能にあこがれ，それに学ぼうとしたり，挑戦したりする下学年の動きが見られる。あるいは，下学年の子供に負けまいと，より多面的に考えたり，リーダーシップを発揮したりする上学年の子供の姿が現れる。互いに刺激し合うことで，上学年，下学年ともに向上していくのである。

さらに，学年の枠を超えて，時にはリーダーとなり，時にはフォロワーとなることがある。上下学年という関係だけでなく，学習内容や活動内容によって立場が入れ替わるのである。リーダーとフォロワーの両方を経験することのできる複式学級では，お互いに相手の存在を肯定的にとらえ，尊重し合える「人間関係力」が育つことが期待される。これは，少子化・個人主義的な社会の中で，ますます希薄になっている人間関係を形成する上で必要な力と言える。その上，複式学級は少人数を生かし，まとまりのある子供たちの行動が見られる。わずか16人のクラスである。グループを作って対立したり，男女が分裂したりしていては，何事も達成できないことを身をもって体験している。だからこそ，いっそう上下学年が協力して問題に立ち向かい，解決していこうとする姿が見られるようになるのである。

②　学習指導の構え

複式学級における学習指導の教育効果を現実のものとするために，次のことを大切にして日々の学習活動に当たる必要がある。

○　一人一人の子供が自分のなりの考えをもてるように，課題や発問を工夫するとともに，思考の跡がたどれるノートやプリントの書き方及び端末の操作の仕方を指導すること。

○　上下学年の子供相互の意見交流が活発にしかもスムーズに行えるように，発言の仕方や話し合いの仕方を，発達段階や学級の特性を考慮して指導すること。

○　個々の子供の学習状況を確実に把握しながら適切な助言や支援を行うこと。

少人数学級であることは，プラス面とマイナス面とがある。例えば，対象とする人数が少ないからこそ，子供たちを多面的にしかもより客観的に観察でき，一人一人に応じた指導ができやすいということはプラス面である。反面，少人数であることから，子供たちの思考範囲が相対的に狭くなったり，集団活動の盛り上がりに欠けたりすることもある。これがマイナス面である。

そこで，プラス面を活用することで，子供を伸ばし，教師が「ゆさぶり」をかけたり，活動に加わったりすることで，マイナス面をプラス面に転換していく。そういう配慮をすることが，複式学習指導における「指導上のポイント」である。

一人一人の能力や個性をきめ細かくとらえ，個に応じた指導を適宜取り入れたり，能力や個性の違いを全体の指導に位置付けたりすることで，一人一人の子供を生かす。少人数学級の利点を活用し，一人一人を生かす指導をするために，例えば，次のような学習指導が構想できる。

・課題や発問に対する反応や応答の違いを個に応じて想定し，教師の対応策を具体的に設定して指導に当たる。→　個別の学習指導計画の作成
・授業中に表れた子供の「つまずき」や「こだわり」を大切にし，「つまずき」や「こだわり」を契機とした学習の展開を図る。→　個の問いを表出させる場の設定
・全員に学習リーダーを経験させ，学び方・話し合いの仕方を習得させる。

（４）学習指導方法

①　直接指導・間接指導

「直接指導」……教師が子供と対面して，直接的に指導する授業形態
「間接指導」……教師と子供が対面関係になく，教師が間接的に指導する授業形態

この二つの授業形態は，異なった学年が異なった内容を一つの教室で学習するという考え方から生み出されたもので，「学年別指導」というものである。この複式学級における直接・間接指導における問題点は，次のように整理される。

１）　直接指導の時間が少ないため，導入に十分な時間が取れない。
２）　他学年に移る必要があるため，理解が十分に図れないまま練習に取り組ませなければならなくなる。
３）　直接指導の時間が少ないため，能力差に応じた指導が徹底できない。
４）　それぞれの学年が異なった内容を学習するため，他の学年の学習に気を取られやすい。
５）　それぞれの学年が異なった内容を学習するため，教師の教材研究，準備等にかける時間が多くなる。
６）　それぞれの学年が別々に行動することが多くなり，学級集団のもつ教育的意義を生かしにくくなる。

しかし，見方を変えると直接・間接指導には，次のような利点もある。

○　子供自身が学習を進めなければならないために，自律の態度が養われる。
○　全員が学び方・話し合いの仕方を身に付けやすい。
○　間接指導の時間が多いということは，一人一人が考える時間や考えを表出する時間が確保されるということである。

②　共につくる授業

附属新潟小学校では，昭和46年の複式学級設置以来，一貫して異学年の子供が共に学習する授業を求め，同単元・同内容・同教材による指導で，個に応じた指導の在り方を探ってきている。これは，学年別の直接・間接指導における困難点を克服するとともに，教育における学校や学級の在り方や子供にとっての学級とは何なのか，学習とはどういう姿なのかを厳しく問うことによって，複式学級を積極的に認めようとする立場から生まれたものである。

同単元・同内容・同教材による指導の利点として，以下のことが挙げられる。

１）　学級内の学習雰囲気が統一され，落ち着いた学習が可能となる。
２）　他学年の子供から学習を妨害されることがなく，現在の学習に注意が集中し，発表も活発に行われるようになる。
３）　学級の全員が同時に学習するので，学級集団としての協力的な態度が養われる。それにより，上下学年の子供の相互理解が深まっていく。
４）　間接指導のために課していた自習や練習がなくなり，理解のための十分な時間が確保できる。
５）　教材研究や教具の準備が分散せずに済むため，能率的な指導が可能となる。
６）　指導目標や指導内容が同一なので，落ち着いたゆとりのある指導ができる。
７）　一人一人の子供の能力や個性に応じた指導をする時間が生まれる。
８）　導入に時間をかけて指導できるので，動機付けが十分に行われ，学習意欲がいっそう高まる。

現在，附属新潟小学校では，年間指導計画を国語・社会・理科・生活・体育・音楽・図画工作・

家庭・道徳・総合的な学習の時間については，二つの学年の内容や教科書教材の系統を考慮しながら，二つの年度に配分するＡＢ年度方式（２本案）をとっている。体育については，同じ内容・題材を繰り返す（１本案繰り返し方式）で作成し，同内容・同教材指導をしている。算数については，系統性の強い教科の特性から，異内容・異教材による指導をしているが，内容の近い単元ではできるだけ同時指導場面を設けることによって，「共につくる授業」を具現するために，次のことを特に配慮している。

○　子供の生活経験や能力差等の実態をとらえて，単元全体の指導を構想する。
○　学習意欲を高め，子供の問題意識を喚起することのできる教材を提示する。
○　評価を適切に行い，教師の働き掛けを見直す。

このことによって，子供が学年の枠を超えて素直に交流し合い，お互いに一人一人の考え方や在り方を認め合って学習を進めていく授業の姿を目指している。

参考文献　「複式学級論」（安部彦二郎著　東洋館出版社刊1962）
「へき地教育研究の課題」（めいけい出版社刊1980）
「授業の研究」（附属新潟小学校刊　第32～179号）
「研究紀要第48集」（附属新潟小学校刊1991）
「複式教育研究会紀要」（附属新潟小学校刊2001, 2010）